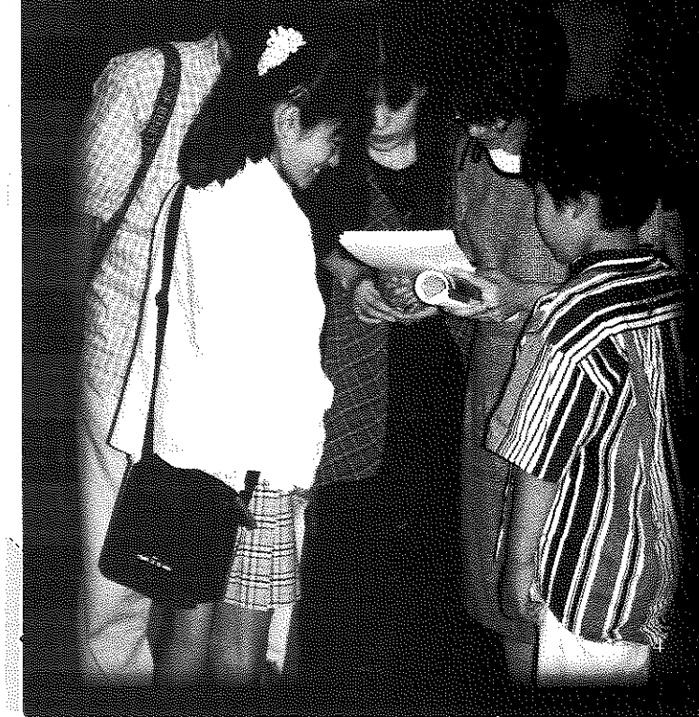
コンペティション・検定・ステップ

特集1　審査講評&採点結果を活かす

～生徒を伸ばすための的確な対応～



コンクールは、予選から始まって結果が出るまでの一時的なものと思われがちです。しかし、コンクールの体験を一層レッスンに活かそうとすれば、生徒それぞれの性格や実力、立場などを理解した上で、コンクール前のサポートから、コンクール後のフォローまでの対応の的確さが、ピアノ指導者には求められているようです。

しかし、サポート、フォローと一言でいっても、ピアノ指導者としては大変な苦労や悩みがあるようです。

今回この特集を編集するに当たり、ピティナ会員の先生方140人の先生から貴重なご意見をいただきました。ぜひレッスンに役立てていただければと思います。

その1
「あなたは審査講評をどう思いますか？」

今回のアンケートにより、ほとんどの先生方が、講評を有効と思っていらっしゃることが分かりました。

実際にどのような面で有効と思っているのか、どのように活用できるのか、先生方にお答えいただいたアンケートデータとともに、先生方のお声をご紹介したいと思います。

※（　）内敬称略

「講評は、生徒にも指導者にも、とてもためになってます！」

一言で審査講評は有効であるといっても、その対象はさまざま。生徒であったり、指導者自身であったり。今まで気が付かれなかった面も多数あるのでは？

■生徒に欠点を意識させることができる

もっとも多かったのが「通常のレッスンで注意している点を指摘されたとき、生徒に改めて欠点を意識させることができる」（長沢あけみ、多胡まき恵、武田真理、三好のびこ　他）というご意見です。またそれは、「努力や練習方法による結果を確認できる」ことにもつながります。

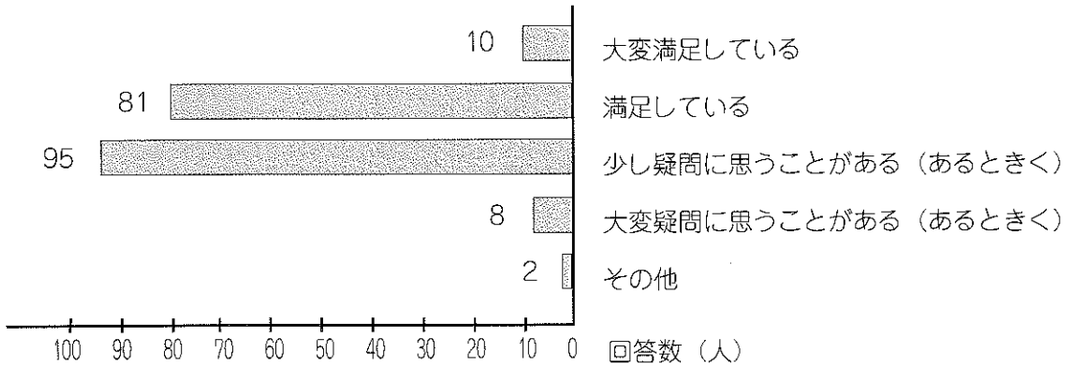
■その後にどう生かされるか

「子供というのは、何か一つでもほめられたり、いい成績を頂いたときは、うれしくてまたやってみようと言う意欲を持たせる」というのが佐野幸枝先生のご意見です。

佐野先生のご意見のとおり顕著にその効果は現れています。「良い結果の時、生徒にとって大変励みになり、その後の練習時間が増える」（江夏　範明）「子供たちが演奏に対し前向きに取り組むようになった」（竹内美保子）

また影響が与えられるのは生徒だけではありません。「予選通過や、良い結果がでたとき指導者・親子共々自信やその後の意欲につながる」（大鳥啓子、多胡まき恵）指導者や親までも、自信が付

（1）これまでのピティナ・ピアノコンペティションにおいて、審査員のコメントや評価に対する先生ご自身の満足度を教えて下さい。（複数回答可）



（左）代々木上原予選・審査講評風景

くようです。

指導者にとっては客観的な意見としてレッスンに生かせることも多いということも改めて認識されました。「日ごろのレッスンの指標になる」（三好のびこ）「基本的なレッスンに役立つことがあるので、コメントはよく覚えて基礎練習への参考に役立てている。とても丁寧にコメントを下さる先生もいて感謝している」（匿名希望）「反省材料にもなる。客観的な意見、評価を得られるチャンスである」（横山　真子）「本人の良い点、問題点を多方面から指摘していただくことで、音楽の幅が広がる」（米元えり、田代美香）「講評はいろいろな観点から一つの演奏をとらえられるので、大変な刺激となる」（三好のびこ）

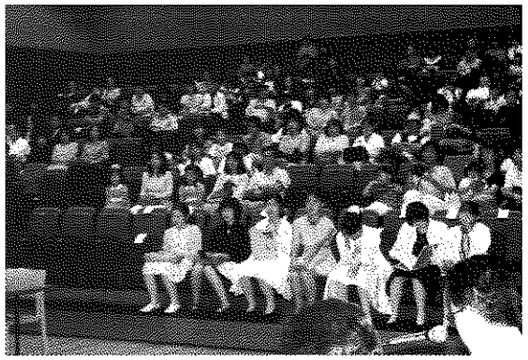
■信頼関係をも作り出す

「複数の先生の評価ということで親子共々納得していただき、とてもレッスンがしやすい」（大島　啓子）「私自身を誉めてある講評（「あなたの先生は大変素晴らしい」など）は大変照れくさいのですが、生徒や親が私を信頼するようになり、助かっている。その後厳しいことをレッスンで言っても信頼関係が強いと大丈夫」（江夏　範明）

■聴いて頂くという意識が生まれる

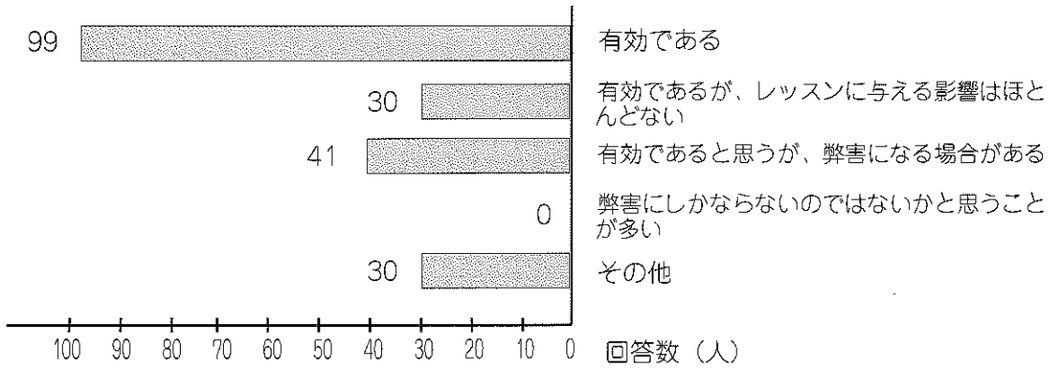
演奏に対しての取り組み方にも影響は与えられます。「聴いていただくという意識を持って演奏するようになる」「自分の演奏がどう他人に聞かれているのか、自分の考えていることがきちんと伝わっているか、客観的な意見として、これからの勉強の反省材料とし、指導者自身の改善へとつなげる」（佐野幸枝）

いづれにしても、「点数がわかる、講評があるというのはとても親切なシステムで、教師にとっても生徒にとっても有益である」（横山　真子）というご意見のとおり、なかなか生徒の演奏を聴きにこられない指導者にとっては、不通過の場合もその原因が講評を読めば少しはわかり、フォローに役立てて下さっている先生方も多いことが分かりました。



（左）講評をまつコンペティター達

（2）コンクールの結果（点数や予選通過など）や審査員からの評価が、レッスンにおいてどのような存在価値があるとお考えですか？（複数回答可）



励みとなった講評！！

■その後の音楽への意欲をかき立てる

「約１７年前ある生徒が本選で「将来有望です」と書いてくださった審査員の方がいました。それを励みに母親が熱心にバックアップし、音楽大学に入ることができました。いまは幸せにピアノ教師をしています」（蓮実　マス子）「生徒に対するコメントで「また聴かせて下さい」「よく指導しています」というようなコメントは、予選通過しなかった生徒にはとても励みになります」

このように、審査講評が励みとなり、その後の音楽への意欲を支えることは多いと聞きます。指導者の先生の立場としても、自分の生徒が励まされるのは嬉しいものです。「テクニックはそれほどでもありませんが、ハートのある男の子を昨年出場させました。評がぼろぼろではないかと心配していましたが、『ピアノ、絶対いつまでも続けてね。きっとね』という励ましの評があり、とても嬉しかった」「「伸ばしたい生徒にとても丁寧に「腕、指」について書いて下さったものがあり、大変感激し、参考にした」（水谷　恵子）

■完成に向けて必死に取り組んだものにたいする正当な評価…自分が審査をするときにも心がけたい

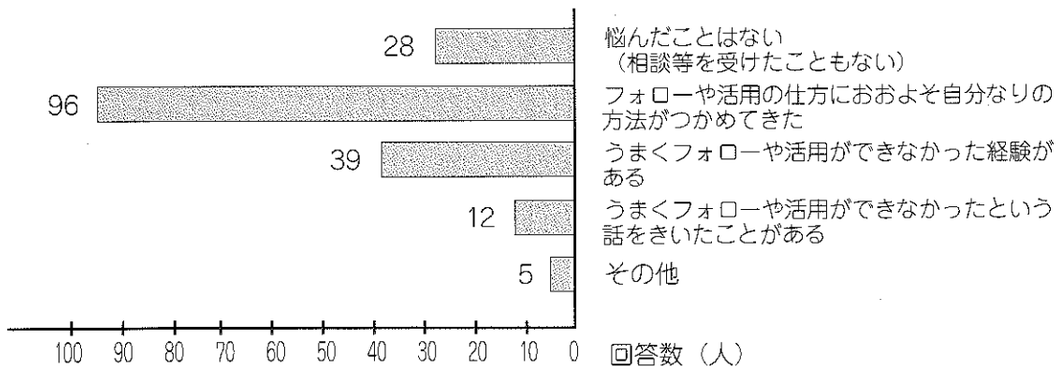
「約10年程前、予選でＣ級の生徒の演奏に10点満点を頂いたことがあります。頂いた時初めて見るその点に驚きと喜びを感じ、それをつけて下さった先生はすごい先生だなと感銘しました。なかなか満点をつけるという事は自身と勇気のいることではないでしょうか。この頃は9点台もなかなか出ず、無難に7.5～8.0あたりを余り差なく付ける先生が増えていると思います。完成に向けて本当に必死で取り組んだものに対する正当な評価はとても重要なことです。私を含め自分の価値観をきちんと持って正当な評価を出せる審査員を心がけたいと思います」（池川　礼子）

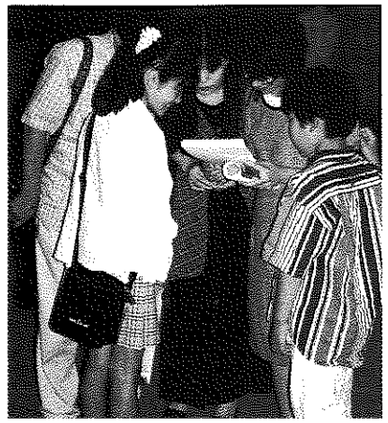
（左）東京デュオ特級・掲示板に結果が貼りだされる。

■指導者自身にとっても励みの言葉です

「コンクールの採点は生身の人間がされるのですからいろいろな点数がついても好みがあるので、当然だと思っています。むしろ同じようなものではおかしい。審査員の先生方それぞれの講評を生徒たちに分かりやすく説明しながらも、いつも自分の仕上げの甘さを反省しております。私にとって、講評は『もっと頑張って指導してください』という励ましの言葉です。生徒がコンクールに向かうことでいつもよりよく練習し、コンクール当日には同じ年頃の子供たちの演奏がきけ、刺激となり励みとなればよいのではないでしょうか」（清水恵子）

（3）生徒や親のピアノに対する意識や意欲、今後のレッスンの方向付けなどの面において、コンクールの結果や審査員からの評価を、どのようにフォロー、活用すべきか悩んだことはありますか？（複数回答可）





（右）講評用紙をのぞきこむ。「どうだった？」とまわりの友達も気になるようだ。

「小さい生徒にも分かりやすいコメントを頂きました！」

「A1級の男の生徒さんのことです。落ちつきが無く、よそ見をしながら弾くので、レッスンでもいつも注意していましたが、なかなかなおらず困っておりました。それが地区予選の時のことです。ユーモアのある先生のコメントとイラストで意識するようになったのか、翌年は本選で優秀賞を頂くまで成長しました。「よそ見をしながら弾くなんて…。なんて楽しい！！でもプロのすることです」短時間にイラストを描いて下さり、生徒自身にはすごく分かりやすかったようです。審査員のコメントは大人（先生や父兄）にわかりやすいものが多く、受験者自身へのコメントが少ないですね。小さな子供にも分かるようなコメントを見ると、日頃先生に言われていることが、第3者の先生にもいわれていることだと気がつきます」（匿名希望）

支部の方の優しさ

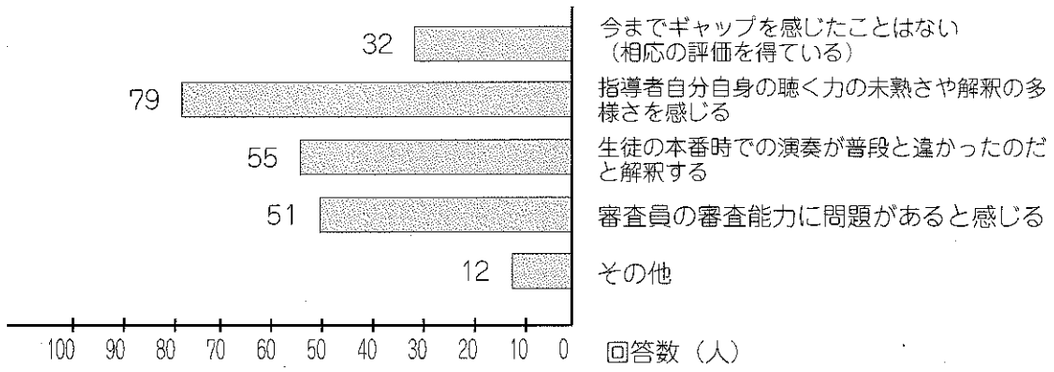
お忙しい中、ピティナ・ピアノコンペティションにご協力を頂いている支部の方々。今回の審査講評には直接関わりのないことかもしれませんが、2人の先生からお話しいただいたので、ご紹介させていただきます。

「中遠東掛川A2級からA1級が終了した段階で、点数係の方が、ある先生に「他の先生方と並ぶよう、全受験者に一点上げて付けて欲しい。そうでないと通過者がなくなる」と申されました。このアドバイスとてもよかったと思い、ご報告します。特に小さな方には未来があるので、その場その場のベテランの方々は適応して下されば私ども、実際に小さな生徒を持っているものにとっては嬉しいことです。」（大林　裕子）

「名古屋では審査員は裁判官でなく「伸ばそう」という視点で評を下さりとても嬉しいです。日響楽器さんのとても良い姿勢を感じました。」（水谷恵子）

（上）審査員長により、感想が述べられる

（4）生徒の日頃の演奏とコンクールの評価の間に、ギャップを感じることがあるとしたら、その原因は何だと思いますか？（複数回答可）



あの時の審査講評のおかげで、今があるのだと思います！！

●穂積有紀

当教室に変わってきて半年、とてもピアノが好きで音楽性豊かな性格もピアノへの姿勢もとてもまじめなお子さん（以下Hちゃん）でした。少々夢中になると、歌い過ぎたり体がゆれてしまうのが難点でしたが、予選はまず通過できると本人、親、私自身も思っていました。しかし結果はだめ。私の教室のほかの生徒数人はHちゃん以外全員合格しただけにとてもショックだったようです。当時平均7．5以上が予選通過ライン。人数制限は「なし」でした。

審査員長の江崎光世先生がとても好意的に誉めてくださっているのに対し、一人の先生が6.5（彼女は演奏に特に大きな失敗はなかったのですが）という点数とともに「あなたの演奏は私は認めない」と言うような、辛辣な講評だったと記憶しています。しかしHちゃんも親もいつまでも落ち込むことなくまたこつこつと練習に励みました。

次の年は予選合格、「首が前に出る」「体がゆれ過ぎる」「部分的にあらい」などの評価を素直に受け止め、本選で賞状を頂けるまでになりました。

D級の時だったと思います。バッハ3声の13番がバロックの課題曲の年、審査員長の関根先生より、8.5の点数と共に「なにより心に染み入る美しいバッハでした。」と書いていただき、親子、そして私も感激し、Hちゃんは泣きました。（その時はすべて8.0以上いただいたとおもいます。）彼女の演奏は決して派手ではなく、華やかなピアニストがたではありません。しかし確実性と丁寧さ、美しい音、何より音楽への愛情が伝わってきて心に残るのです。

▲穂積先生（左）と、Hちゃん（当時の写真より）

私の教室にはもう一人、Hちゃんと同級生で才能型の女の子がいまして（なんとC級の時、予選でお互い印象に残り友人になり、その子が当教室へ移ってきたと言うエピソード付き）その子はいつも運も良く全国大会にすすんでいます。コンクールなどでの評価はいつもその子が一歩リード。

しかしHちゃんはマイペースでこつこつ頑張り、現在東京音楽大学附属高校の演奏家コース2年（もう一人の子も同じく演奏家コース）、あのとき嬉しい講評を頂いた関根先生にお世話になっております。

これもすべてピティナのご縁なのです。Hちゃんはピティナに育てていただいたと親子、私も感謝しております。あの時の6.5の講評と予選落ちのことは今でも話題にのぼります。でもあの時、あの講評があったから今のこの子があったのだといいきかせてきました。きっとわかってくれていると思います。どんな評価も謙虚に受け止めこつこつ努力すると言うことがこんなにすばらしい事なのだと身を持って教えていただいた一例です。

その2
先生方の工夫をご紹介！！
「こんな時どうしますか？」

今やピアノ指導者は、ピアノをただ教えればいいのではなく、「その後の生徒個人にあわせた対応法」が必要とされる時代になってきました。
しかし、一言で個性と言ってもその種類は多様であり、それぞれの問題に対しどのような言葉掛けがのぞまれるのか、悩まれることも多いかと思います。そこで、生徒個人へどう対応すればよいのか、アドバイスをいただきました。

Q 不適切な講評や評価をもらい、生徒や親が不満を感じた

「なめらかに品格をもって演奏した生徒が落ちて、雑な音で弾いた生徒が受かることがあります。」（匿名希望）
「7、8年前にA1級でひとりの審査員だけ極端に低い点数がついたときがあり、通過できなかったことがありました。」（匿名希望）
「（小5の生徒に対して）『あなたは音楽をする喜びを感じているのですか』というコメントを書かれたことがあります。」（匿名希望）

A

▶「審査員のせいにしても生徒にとってプラスにならないため練習の量や演奏への熱意が受かった子の方が上なのだと話しています。」

▶「7、8年前にA1級でひとりの審査員だけ極端に低い点数がついたときがあり、通過できなかったことがありましたが、次からは誰が聴いてもいい演奏になるよう頑張ろうと励ましたことがあります。」

▶「（小5の生徒に対して）『あなたは音楽をする喜びを感じているのですか』というコメントを書かれたことがあります。子供と一緒に本気で怒りました。でも、忘れるようにしてます」

▶「評価には審査員の好みもあるので、その生徒の演奏に好感を持って下さる方と、それほどでもない方がいるのは当然です。一つの曲でも、CD等で何人かの演奏を聴かせて、この様にテンポも音色も違うのだから人によって評価が違うのは仕方がありません。勉強していく間にだんだんに分かるようになります。」

▶「こういうことはコンクールに対してついて回るものだと言っております。今から10年ほど前ならどの人の意見も同じでどの人が一位と言うことがはっきり分かったのですが、こんなに大勢が受けベルトコンベアー式に進んでいくと、こういうことは起こるべくして起こると思います。コンクールの受ける方の体勢を変えていく、考え方を変えていくようにしております。小さい子にはきちんとひけても運任せ、大きくなったら本当の実力の世界だと言って頑張るようにしております。」

Q 審査員によって評価や点数が違いすぎることに、生徒や親が不満を感じている

「『とても曲の感じを捉えてて良かった』『曲の解釈が少し違ったようです』生徒からどっちが本当なのと聞かれとても困りました。親御さんにしてみても何かしら不信感という感じのようです。」（田代美香）
「『音がきれい』とか『音をもっと美しく』とか同時に書かれることもあります。」（江藤美穂子）
「バロックの曲で、ある審査員は『歌いすぎないように』とかかれ、別の審査員は『もっと歌うように』と全く反対のことが書かれました。親に全く反対のことを書かれてどのように弾けばいいのか分かりませんと言われました。」（匿名希望）
「評価が正反対に書かれている時は生徒、親共々戸惑う様です。点数に1点以上差があったり、コメントが正反対の場合など…」（柏崎恵子）
「Y子ちゃんはとてもダイナミックで、ともすれば『アク』の強い演奏をする子だった。何人かには乱暴といわれるのを承知で受けさせたらA審査員は『9.0』B審査員は『7.5』と点の開きがあり、A氏は個性的な魅力溢れるダイナミックな演奏と評価し、B氏はやはり乱暴と書いてあった。Y子ちゃんと母親は大変ショックを受けました。」（多胡まき恵）

A

▶「『好き嫌いがはっきり分かれるということは皆に好かれる一般的な演奏ということではなく、とても個性的な演奏ができたということだから、いいことじゃない。あなたは自信を持って自分の演奏をすればいいのよ』とアドバイスします。その子は今でも自由過ぎるほど、自分の演奏をしています。」（田代美香）

▶「人間にはいろいろな感じ方があります。みんなにきれいだと思われるように、もっと美しい音で弾くように頑張りましょうと言いました。」（江藤美穂子）
「『強弱の付け方ではオーバーにやりすぎているのだけれど、音の粒としてはレガート奏法があまり上手にできていなかったので、「歌って」「歌いすぎないで」と反対のことが書かれたのかもね。』といって、丁寧に教えて納得させました。」（匿名希望）

▶「個性的という事はとても大切な事、但し個性は服のセンスやお料理同様、好き嫌いがあるものです。大好きといわれる人は、大嫌いという人も必ずいるのよ。今は、コンクールのために感覚を否定するのではなく、自分で感じる事が大切であり、型にはまった演奏よりも、将来はずっと魅力的になると思います。アドバイスはあなたが我流になりそうになる時の「ブレーキ」に思いなさい。」（多胡　まき恵）

▶「最初の参加では必ず戸惑いや何をどう感じてよいのかわからないようだが、慣れてくると視点が定まってくるので、数回の参加をもって本人に納得させるようにしています。」（秋谷和子）

▶「点数に関しては具体的にそれぞれの生徒にコンクール前『だいたい平均でこのくらい取れるように』と目標を与えて受けさせています」（由良　佳久）

アンケートにご協力いただいた先生方
（50音順・敬称略）

秋葉　暁子　（愛媛県松山市）
秋谷　和子　（兵庫県宝塚市）
浅井　典子　（北海道釧路市）
厚地　とみ子（熊本県熊本市）
飯田　文代　（青森県むつ市）
伊形　祐子　（熊本県熊本市）
池川　礼子　（鹿児島県鹿児島市）
池田　麻理　（兵庫県神戸市）
石井　之枝　（茨城県稲敷郡）
石川　洋子　（神奈川県中郡）
石黒　加須美（愛知県一宮市）
石原　道子　（埼玉県所沢市）
市来　貴子　（鹿児島県鹿児島市）
伊藤　順子　（愛知県犬山市）
伊藤　みち　（愛知県名古屋市）
稲垣　千賀子（兵庫県川西市）
岩倉　華子　（茨城県鹿島郡）
岩佐　生恵　（愛媛県今治市）
江藤　美穂子（長崎県諫早市）
江畑　麻奈美（福島県双葉郡）
大島　啓子　（愛知県名古屋市）
大津山　姿子（熊本県熊本市）
大場　多恵子（静岡県周智郡）
大林　裕子　（愛知県名古屋市）
小川　愛美　（東京都三鷹市）
長鎌　明美　（愛知県常滑市）
笠井　礼子　（島根県大田市）
柏崎　恵子　（栃木県宇都宮市）
勝田　美也　（島根県浜田市）
加藤　さとみ（愛知県刈谷市）
加藤　智子　（千葉県市川市）
金子　勝子　（東京都港区）
加茂　久美子（大阪府大阪市）
川口　智子　（富山県射水郡）
川口　由紀子（長崎県佐世保市）
川名　悟　（栃木県宇都宮市）
川名　雅美　（栃木県宇都宮市）
吉津　恭子　（福島県相馬郡）
木村　裕子　（栃木県宇都宮）
倉本　里栄　（埼玉県南埼玉郡）
小池　恵美　（埼玉県浦和市）
江夏　範明　（神奈川県大和市）
江夏　祐子　（神奈川県大和市）
後藤　靖江　（島根県浜田市）

Q 自分が思った以上に演奏が評価され、有頂天になっている

「コンペティションでは指導者はよく考え、その生徒にあった曲を与えるため、まだ実力が付いていないのに高い評価を頂くことがあり、生徒によっては去年より点数が上がった、下がったと気にする人もいます。」（匿名希望）

「低学年で賞を偶然取ってしまった生徒はスリルばかり求め実力が付かなくなってしまいます。」（匿名希望）

「フレーズの納め方、音色のむらなど、まだまだ不満のままD級へ出した子が予選通過。「先生は駄目って言うけどほらね」的なムードだったが駄目なものはだめ。格好だけでちゃらちゃらかわいくて受かるのもそこまでと、今は分かったようです。」（匿名希望）

「あまり練習もせず、本番の演奏もそんなに良くなかったのに、予選支部賞を受賞した生徒がいます。」

「小さい頃はあまり練習しなくても指導者の力でいい結果を出すことができますが、それを自分の実力と勘違いし、大きくなったときにこちらが要求する練習をしてくれない事があります。」（匿名希望）

A

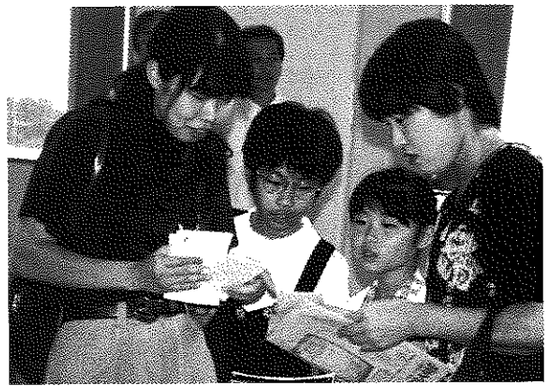
▶「生徒によっては去年より点数が上がった、下がったと気にする人もいますが、その様なときは審査員のメンバーまた地域によっても点数は違うので、点数で一喜一憂するよりも、コンペで自分が練習したこと、これだけは出してきたいということに重点を持たせるようにしています。」

▶「スリルばかり求めている生徒には毎年は受けさせないよう、じっくり勉強させるように方針を変えていこうと心がけています。」

▶「毎年は受けさせないよう、じっくり勉強させるように方針を変えていこうと心がけています」

▶「あまり練習もせず、本番の演奏もそんなに良くなかったのに、予選支部賞を受賞した生徒がいます。頭にきたので、頂いたものを返すように生徒にいったことがあります。その子は他の面でもあまり努力せずに何でも上手くいってしまう生徒でした。もちろんピアノでもそうです。その子の生まれ持った力でしょうが、同じ教室内でもっと努力している子が認められず、またあの子がと残念に思うことがしばしばありました。世の中上手くいかないことがたくさんあります。」

▶「小さい生徒さんへの講評ですが、よく歌えていて技術的に難点があってもっと練習を積んで欲しいと思っている生徒が実際の力よりも高い評価を受けてしまいます。級が進むに連れてテクニックの面で本人に今以上の努力を要求されてきます。当然親の方も期待してしまいますから、本人の望む方向とは違う練習、レッスンという毎日になってしまうのです。その時はしばらくコンクールを休ませる、またソロ以外連弾アンサンブルに目を向けさせ孤独にさせないようにさせる、また一緒に頑張れそうな同年代の生徒とレッスンをするようにする、さらにステップアップできそうないい演奏会を聴く機会を案内するなどします。」



（左）指導者はもちろん、親も講評は気になるものです。

Q コンペの結果にとらわれ、教室内で仲が悪くなってしまった

子供のなかで、成績が違うため、天国と地獄の差を見せられ、指導者としては複雑な夏を毎年迎えています。（匿名希望）

A

▶「コンペティションは参加することによって、目標に向かって頑張る、やり遂げる、弱気になりそうな自分に勝つ等の為に参加するのであって、決して他人と競わないで欲しいということを常々言っています。」

▶「教室の生徒が多数でるときは直前に『落ちても受かってもお友達』という点を強調しています」

▶「以前仲の良い二人が、通過者・不通過者と明暗を分けてしまったとき、親同志に多少歪みを感じ悲しい思いをしたことがあります。その後教室内での結果報告を出すときに、必ずこの結果が全てではないこと、またたとえ落ちてもチャレンジすることの大切さや、悔しい思いをしたことも大切な経験であることなど、私のコメントを述べ、親の受けとめ方にも気を配っています。」

（上）審査会議より。審査員の方の表情も真剣です。

小林　敦子　（栃木県宇都宮市）
斉藤　桂子　（新潟県新潟市）
斉藤　幸子　（埼玉県久喜市）
桜井　伸子　（栃木県河内郡）
櫻井　美希　（栃木県足利市）
佐藤　まゆみ（山梨県大月市）
佐野　幸枝　（神奈川県横浜市）
渋谷　利子　（千葉県印旛郡）
清水　恵子　（愛知県安城市）
清水　雅子　（群馬県多野郡）
榛葉　和子　（長野県諏訪市）
杉浦　日出夫（愛知県刈谷市）
杉本　安子　（神奈川県川崎市）
住田　智子　（島根県江津市）
角野　節子　（富山県氷見市）
勢志　佳子　（大阪府豊中市）
勢志　典子　（大阪府堺市）
添田　みつえ（福島県双葉郡）
高嶋　麻企　（神奈川県横浜市）
高橋　佳代　（高知県高知市）
高畑　真弓　（富山県氷見市）
宝木　多加志（福岡県北九州市）
滝澤　清子　（千葉県成田市）
竹内　晴代　（京都府舞鶴市）
竹内　美保子（千葉県印西市）
武田　宏子　（香川県高松市）
武田　真理　（東京都小金井市）
竹中　喜成子（北海道帯広市）
多胡　まきゑ（大阪府吹田市）
田沢　恵巳子（東京都練馬区）
田代　美香　（鹿児島県川内市）
田中　京子　（福岡県久留米市）
段上　律子　（三重県津市）
辻田　裕子　（大阪府泉南郡）
堤　好美　（滋賀県草津市）
角田　ちか子（宮城県多賀城市）
時藤　恭子　（福岡県田川郡）
友井　啓子　（神奈川県横浜市）
長井　加世美（島根県浜田市）
中里　かおる（栃木県宇都宮市）
長沢　あけみ（東京都八王子市）
長島　美津子（栃木県宇都宮市）
中島　亮子　（福井県坂井郡）
長野　正美　（北海道阿寒郡）
中村　真代子（静岡県湖西市）
夏目　芳徳　（長野県長野市）
新谷　恵子　（千葉県印旛郡）
根津　栄子　（千葉県市川市）

Q 2つのタイプ、どちらも努力の成果を見てほしい

「感覚的に弾く生徒」&「歌うのは苦手でも努力を惜しまない生徒」
地区予選ではどちらも評価して頂きたいと思います。（江夏　範明、田代美香）

（上）審査会議より。

A

▶「歌えるとか歌えないだけで点数をつけてしまう審査員は転んでいたり、左右のバランスが悪くても、歌って弾いているような生徒に非常に甘く、高得点をつけてしまいます。本人が有頂天になり、その後練習をますますしなくなり、困っています。子供には2つのタイプがあると思うのですが、その両方を予選レベルでは正しく評価して欲しいと思います。

【タイプ1】感覚的に弾く子供。（頭であまり考えないが、歌えている）練習の根気や、まじめさにかけるが、感覚があり、一見才能がありそうに聞こえる。C級レベルになるとついてこれなくなることが多々あり。練習の努力の必要性を講評に書いていただくと助かるのですが。

【タイプ2】歌うことや自分を表現するのが苦手だが、いつも学習的。隅々までよくさらうので崩れたりしないが、歌えない。練習の苦労を本当に審査員の先生方に分かっていただけたらと思います。子供は指が弱いので、それを克服するために一日何時間も練習しています。努力の価値を認め予選ぐらいは通して欲しいと思います。このタイプの生徒で、大学生になって歌えるようになった子も沢山います。」（江夏　範明）

▶「今年の鹿児島地区予選参加者の中で13名中8名がA先生より、8.5という高い評価を得たと聞きました。この先生の評価は音楽性と自分の音をしっかり聴けるという点に絞ったものだったそうです。8名中予選通過した生徒は6名、まだ全身を使いきれずに優良賞止まりになった生徒には具体的に体操の宿題をだしました」（市来　貴子）

▶「以前合格・不合格だった生徒のその後の例を挙げ、長い目で努力する方向に持っていき、不合格の場合は何が足りなかったのかじっくり話し合います」

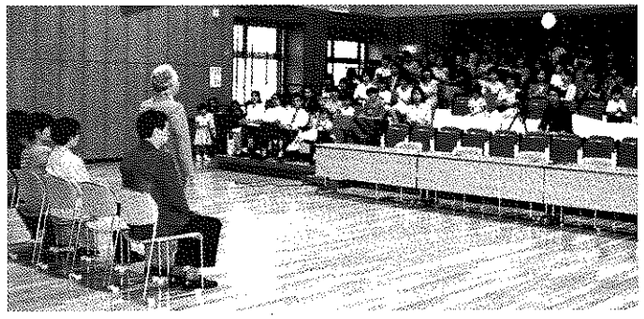
（上）筑豊地区予選にて。添田長賞が手渡される。

Q 評価やコメントにとらわれ、ステージでの演奏に恐怖を抱くようになってしまった

「AとCは小さいときから同じ幼稚園、同じ学校で家も斜め前の仲良しでした。しかしCの親が予選の通過・不通過など、Aとの結果にこだわったために、小学校3年生にして、Cが円形脱毛症になり、その後ステージに出ると心細い演奏しかできなくなってしまいました。」（匿名希望）

A

▶「本当につぶされた状態で、昨年までは親も子もずたずたの状態でした。今年のコンペティションで親を子供から全く切り放して子供だけで練習させてみますと、少し力が戻ってきて13日の予選には力強く演奏して予選を通過しました。しばらくこの状態で様子を見ようと思っております。」



（右）鳥取地区予選会場にて。審査講評の風景。

Q 自分の思っていたほど演奏が評価されず、やる気をなくしてしまった

本選上位に残れると思っていたのに、優秀賞止まりだった生徒がいます。

A

▶「上達した部分をほめて挙げて来年に向かって頑張るように言います。小さい子供は直ぐに立ち直りますが、音楽の道を進もうと思っている中学生・高校生の頃になると、かなり落ち込む人がいます。そういうときはピアニストになっている人でもそういう時期があったことを話しやる気を起こさせるようにしています。」

▶「人間の耳はその時々の状況で変わる。例えば上手い演奏を沢山聴いた後、逆に下手な演奏を聴いた後等、評価は違ってくるものであることを話します。あまりにも評価に固執するとコンクールに呑まれることになります。指導者として大切な事は“このようにコンクールを利用しつつ生徒を育てているのだ”という点を明確にして親御さん達と接する事だと思います」（金子　勝子）

▶「小学校の上級学年（C級からうえ）には自分で考えられるよう指導しています」（岩佐生恵）

野村　征子（宮城県柴田郡）
蓮実　マス子（栃木県那須郡）
花崎　桂子（香川県高松市）
羽原　久美子（広島県福山市）
林　恵里子（愛知県豊田市）
原　香奈子（福島県双葉郡）
原田　五月（佐賀県杵島郡）
東島　尚美（佐賀県佐賀市）
平間　百合子（宮城県仙台市）
深見　啓子（福岡県福岡市）
深谷　直仁（愛知県高浜市）
福田　千恵子（東京都青梅市）
藤澤　真理子（京都府舞鶴市）
保坂　千里（埼玉県鴻巣市）
穂積　有紀（千葉県我孫子市）
本田　綾子（島根県江津市）
松内　洋子（東京都青梅市）
真継　豊子（埼玉県上福岡市）
松崎　伶子（東京都新宿区）
松永　ひろみ（大阪府大阪市）
松原　三恵子（東京都練馬区）
水谷　恵子（岐阜県高山市）
水谷　紀子（愛知県名古屋市）
水野　千春（愛知県名古屋市）

溝口　みどり（東京都青梅市）
三藤　三枝（岡山県笠岡市）
宮内　さよ子（愛媛県松山市）
宮村　トヨ子（兵庫県宝塚市）
三好　のびこ（静岡県藤枝市）
村上　紀子（千葉県東金市）
望月　玲子（長野県松本市）
森　淳子（和歌山県和歌山市）
安本　久仁子（岡山県総社市）
山口　朋子（富山県高岡市）
山路　三千子（鹿児島県鹿児島市）
山田　つづみ（三重県津市）
山本　利昭（愛媛県松山市）
山脇　直子（島根県浜田市）
由良　佳久（千葉県千葉市）
横出　州美子（愛媛県伊予市）
横山　真子（千葉県柏市）
吉岡　明代（徳島県徳島市）
好永　裕見子（愛媛県松山市）
善見　伊岐（兵庫県伊丹市）
米元　えり（茨城県つくば市）
和田　弘子（千葉県千葉市）
和田津　美智代（徳島県鳴門市）
渡辺　泉（愛知県名古屋市）

その3
インタビュー(1)

「審査員の先生を信用していただきたい」というのが私の本当の気持ちです

藤澤 克江 先生

ふじさわ　かつえ／
東京音楽学校（現　東京芸術大学）卒業
当協会運営委員　検定・指導者育成委員　コンクール事業担当者連絡会委員
審査員選考委員長　授賞企画委員

今回のアンケートにより、ほとんどの先生が講評について前向きに捉えられていることがわかりました。しかしその反面、マイナス面も多く見受けられるのも事実です。
現在審査員選考委員会委員長をつとめる藤沢克江先生にお話を伺いながら、これからの審査講評がさらに生徒や先生のためになるにはどうすればよいか、考えたいと思います。

審査員を選ぶにあたって

今やピティナ・ピアノ・コンペティションは世界でも有数の規模を持つコンクールとなりました。それを考えても審査員選びというのはかなりの苦労がおありと存じます。実際どのように審査員を選んでいるのでしょうか。

審査員選考委員会は、例えばその先生の教えてきた生徒が、どういうコンクールに出場し、どのくらいの成績をとっているか、またその先生の演奏活動等の業績を見させていただき、審査員を選びます。

しかし、ピティナ・ピアノ・コンペティションは全国各地で約150もの地区予選・本選があります。その一地区に5人の審査員が審査にあたるわけですから、のべ700～800人の審査員を集めなければなりません。またお願いした審査員の先生には、日程や地区を考慮いただき遠く離れたところまで無理を言って審査にいっていただくこともあります。ですから審査員の方々に「こうしてください、こうしてはだめです」と注文を付けられないのが現状なのです。

それでも、あまりに目に余る場合には、その後審査をご遠慮願っていただくこともあります。

お互いの信頼関係を第一に

しかし、審査員や指導者の間には誤解が生じてしまうようです。それぞれの立場でどのようなことに気をつけたらいいと思いますか。

たとえば、大学の教授というのは、お願いしてやってもらうのと同じように、コンペティションの審査員もお願いしてやってもらうものです。

人間にいろいろな顔があったり、いろいろな性格があるのと同じように、審査員の先生方にいろいろなやり方や講評があるのは当然のことと思われます。その先生を信用して頼んでいるわけですから、受け取る側としても、審査員の先生を信用していただきたいというのが私の本当の気持ちです。

今回のアンケートでも、「受け取る側の身になるような講評をお願いします」とか、「もっと言葉遣いに気を付けてください」ということが多く見受けられました。ところで、審査員の方々には「審査員ハンドブック」というものをお配りしていますが、その中に注意事項として、このような意見を入れることはできないものなのでしょうか。

その先生の常識範囲で審査を頼んでいるので、なかなか審査員ハンドブックに「こう書かないでください」ということは書けません。「今からの子供の芽を摘まないよう、将来に役に立つような講評をお書き下さい」とお願いするだけです。しかし、初めて審査をされる方は悩まれることも多いかと思われますので、その方たちのために、みなさまのご意見より諸注意を与えるページを設けたいと考えております。

勉強することが考え方の幅を広げることに

一番多かったエピソードの一つとして、「審査員によって評価が異なる」ということが挙げられています。受け取る側はもちろん、指導者としてもあまりに開きのある評価を頂いたときには、どうフォローしていいのか迷うのだと思われます。

以前、ある演奏に8.0をつけた方がいらっしゃいました。しかしその曲をよく知っている私からすれば、その演奏には8.0という点数はとてもつけられないものでした。その審査員の方はどうもその曲を知らなかったようです。「私はこういうところが変だと思いました。だからこの点数しかだせません」と審査会議できちんと理由を述べました。しかしもう点は出てしまっているわけですから、変えることはできません。「評価が審査員の中で分かれてしまう」ということが起きる例の一つだと思います。

私は審査員はもちろんですが、指導者の先生にも勉強していただきたい、もっと教えるだけでなく、ピアノをご自分で演奏していただきたいと思います。そうすれば曲に対しての考え方も広がるかと思います。勉強していると、自然と講評に対しても「ああ、この審査員の先生はこういう聴き方をしたんだな」とお分かりいただけ、生徒に対しても対応できると思います。また自分自身の考え方、教え方に対しても、自信が持てるようになるものです。

私が学生の頃、先生というのはレッスンで何も言いませんでした。一曲弾くと「だめ」というだけ。どこが悪いのか、どこに気を付ければいいのかということは一切おっしゃりません。しかし私はその先生の「だめ」という一言をもとに、図書館にいって勉強し、自分で考えてピアノ演奏に取り組んでいたものです。もっと皆さんに、自分から勉強する意欲を持っていただければ、今マイナスに受け取られる講評も意義深いものとなるのではないでしょうか。

審査員、コンペティターのさらなる飛躍のために

審査員の先生方も、ご自分が書かれた講評が子供にとってどういう影響力があるか、興味を持たれると思います。そこで、今本部では、講評をいただいたコンペティター達が、その審査員の先生方のご意見をうかがう機会を設けたいと考えています。

今回、集められた皆さんのお声を審査員の先生方に読んでいただくのもいいですね。それを読んで、審査員の先生も何かを感じるでしょうし、実際に審査をするときにどんなことについて書けばいいのか、どんなことに気をつければよいのかお考えになることでしょう。

その3
インタビュー(2)

「人の性格」を知ることは、指導者の対処法を広げます

指導者の先輩でもあり、審査員の経験も豊富な江崎光世先生に、先生の教室では具体的にどういうことに心がけているのか、お聞きしました。

江崎 光世 先生

えざき　みつよ／
国立音楽大学卒業
本部職務評議員　運営委員　検定・指導者育成委員　コンクール事業担当者連絡会委員　課題曲選定委員長（Aグループ）　新曲課題曲選定委員

広い視野で物事をみる

20年も前のお話ですが…。

「先生。おもしろいよ。私のピアノで4点から9点までもらっちゃった。」始めてピティナを受けさせた生徒の点数です。9点は外国の招聘審査員の点でした。

私がピティナのコンペティションを活用しようとした一番の動機は4期別の課題曲と当時では珍しい外国人審査員が含まれていたこと、その上講評が受けられることが大きな魅力だったからです。

「4点の先生は『あなたには、まだたくさんお勉強することがあるから、がんばってね』ということよ。9点の先生は、「私には気に入った演奏だったから、ご褒美ね」ということかな」

音楽や絵画など、芸術のジャンルほど主観的で個人的なものはないでしょう。音、音楽、雰囲気、人間性等、好みは千差万別です。ましてや発育、勉強途上のこどもの演奏においては、ステージでたまたまそのときの実力が十分に発揮できた演奏であっても人間の成長の選択と同様に、音楽の成長も様々に変化していくものです。

好運にも入賞できたことは喜ばしいことですが、それがイコール実力の保証となるものと思いこんでしまうことは大変危険なことです。

「コンクールとは「おみくじ」みたいなものよ。「吉」が出るか「凶」がでるかそれが楽しみで毎年受けてしまうのよ」といった生徒の言葉が我が教室の伝統になっているのかも知れません。ピアノの勉強の一部と思い、あまり深く考えず、時にはゲーム感覚でチャレンジしている生徒もある位の気もすることさえあります。

私自身も、コンクールを成長過程の一つの要素として考えプロセスを大切にを最優先として活用しています。コンクールには「失敗から立ち直るバネを養うもの」「継続的に活用することによって努力の尊さを体験する」など、活用と効果を考えればたった一回の評価のみで一喜一憂することの無意味さを感じます。

講評や評価を建設的に受け止め、反省点は次への目標とし、良い点は素晴らしい個性と認めてあげましょう。指導者には評価の受け止め方を指導していくことも大切な仕事の一つであると思っています。これからの時代の先生は、ピアノの弾き方を教えることだけでなく、以下に広い視野に立って物事を捕らえていくことが出来るか、また問題が起きたときに、どのように対処すればよいか、先を予見し生徒と共に自らも前進する心がけがより大切な時代になっていくようです。

大きな単位で物事をとらえる

なかには競争好きの生徒やお母さまも多いと思います。コンクールという競争の場に魅力を感じるのか、本当に音楽が好きなのかわかりかねる場合にも遭遇することもあります。　私はよくお母様方にものの見方を変えてみられてはとお話します。子供の成長を長い単位のサイクルでみつめましょうと。例えば学校の成績でも、国語はコンスタントによいのに算数は年によって、学期によって変わってしまうということがあります。不変なものはその子の特性でありかわるものについては、どうしてなのか、何でつまづいているのかという問題を見つけることが大切ですねとアドバイスしています。

聴き方は一様でないことを学ぶ

私のレッスンでは「聴く耳」を育てるために「連弾」と「手紙交換」は欠くことが出来ないものです。

「連弾」では同じ場所で同じピアノで弾いても、お互いの感じ方、身体の使い方、呼吸の仕方、打鍵のタイミングなど人によって全く違うこと、身体で体験させることによって音楽の感じ方は人それぞれで違うということを学んでいきます。そしてお互いの中から自分にないものを発見し、吸収し合います。

「手紙の交換」は勉強会やリハーサルでは各自思い思いのメモ帳にお友達の演奏の感想を書いて交換します。度重ねていく間に自分の演奏に対しても人によって聴く観点が違うことがわかったり、自分でも気がつかなかったことを指摘され新たな発見をし、聴き方は一様ではないことをまなびとっていきます。従ってコンクールの講評の受け取り方も日頃から友達、先輩、後輩からのアドバイスと同様に、素直に受けとめられる心の器は出来ているように思います。

対処方法としては、まず年齢が関係してきます。導入期から小学校低学年までの生徒さんは、まだ自己主張のあまりない年齢ですから、指導者としては親御さんへの対応が問題となってきます。性格別が関係するのはその後、小4、5年生から中学以降です。そこで初めて親と指導者は個性を考えた上でどうフォローするかという事が問題になってきます。親や生徒への対応法とひとことでいっても、「十人十色」というように、人の個性はさまざまです。今は書店でも、性格別にどう関わっていくかという本もたくさん出版されていますので、読んでみられてはいかがでしょうか。ピアノ教育にも役に立つことは多く、指導法にも新たな発見が期待できると思います。

そこで、編集部は、江崎先生のアドバイスをもとに、子供の性格についてまとめてみました。「こういう生徒私のところにもいるわ」ということ、ないですか…？

♪完全主義を好む努力家の生徒

特徴としては楽しむことより、努力することに意識を置きがちであり、完璧にできないものや理想に反するものにはいらだちを感じ、目を反らそうとする傾向にあります。

今できていなくても、人は成長することによってできるようになるものであるということを理解させ、受け入れさせるように言葉掛けを考えるのが指導者にとっては必要です。　また「完全」への強迫観念は、「音楽をおおらかに楽しむ」ことを難しくさせているため、コンペティション前のサポートも充分に必要と思われます。

♪成功を追い求め積極的で優秀な生徒

何事に対してもさまざまな工夫や努力を試み、要領よくこなすので、良い評価をされがちですが、失敗に対しては言い訳をしたり、他人のせいにする傾向があり、結果を出さなければ愛されないという強迫観念にとらわれています。

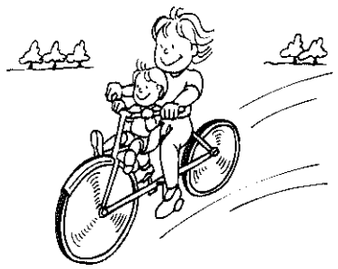
「何事も達成して初めて価値がある」というようなアドバイスは逆効果。失敗したときが人間性を得るチャンスです。成果によって人間の価値は決まるわけではないこと、つらさ、寂しさ、悲しさを感じることはよいことだということを教えましょう。勝ち負けがはっきりするのを好みがちなので、コンペティションを競争の場としてではなく、努力する過程が大切ということを認識させるとよいでしょう。

♪明るくユーモアに富んだ元気な生徒

物事は全てうまくいくはずと信じる楽観主義者。さまざまなことに興味は持つものの、一つのことをじっくりやるのが苦手で、嫌なことからは目を反らし、努力は続きません。親や先生におこられても、その時は反省しますがすぐに忘れてしまします。常に前向きで、くよくよ思い悩むことは少ないのですが、「苦しみから逃げるな」という忠告自体が苦しみであり、ごまかしたり、話をそらしたりといった策略を練り、自分のやりかたを通そうとします。このタイプの子供を強制するのは無駄な努力を考えた方が良さそう。指導者としてはアイデアや意欲をほめるのではなく、結果への期待を表してやることが必要となります。「ちゃんと最後まで練習しなさい」という言い方ではなく「弾けるようになったらどんな感じの曲になるのかな？楽しみね」という言葉掛けが望ましいでしょう。

♪特別な存在を好む生徒

他人とは違うユニークさをもつ自分を見せたいという強い欲求をもちますが、ストレスを感じると周囲の気を引いたり、特別な存在と認められることに執着し、過度に依存的になるのが



特徴です。繊細で敏感な一方で、自分の価値が認められなければ、憤慨、強情、辛辣といった感情はとても激しいものとなり、またその感情を隠そうとはしません。

このタイプの子供は一見穏やかそうな表情の裏に、嫉妬心や欲張りなどの激しい想いを秘め、自尊心は傷つきやすく、すぐに自己嫌悪を感じやすいので、指導者や親は彼らの繊細さと激しさをよく理解し、自主性を尊重し、過剰な干渉や保護を慎むと良いでしょう。

♪自立した冷静な生徒

人を観察することを好み、あまり多くの人と一緒にいることを望みません。感受性が鋭い反面、引っ込み思案になりがちで、対人関係のトラブルやプライバシーの侵害を恐れています。知的好奇心は旺盛で、一般的に学業は優秀であるのが特徴です。

難しいことにチャレンジするのは、消極的であり、また争い事や高圧的な人の前に出ることは窮屈さを感じるため避けようとします。そのため、このタイプの生徒には「もっとはきはきと」「自分の思っていることを言いなさい」という言葉は禁句。過干渉はストレスがたまる原因となり、無視したり不快感を露にします。親の愛情表現も過度になると、負担となるので注意が必要です。

♪人の目を気にする生徒

気持ちの優しい子ではありますが、人の役に立ち、人の感情に順応することで関心を持たれようとします。大人達が自分のどこをかわいいと思っているかを把握する力があり、他者の避難や批判にも敏感です。繊細で、心の揺らぎも大きいので、親や指導者は一貫性を持って接し、高圧的なものの言い方も避けた方がよいでしょう。彼らが反発しているときは、回りの人の拒絶を恐れずに自我にめざめようとしているときなので、意見を丁寧に聞いてあげる必要があると思われます。

Teaching Seminar vol.3 PTNA Piano Teaching Seminar vol.3

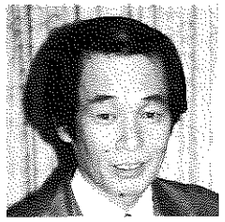
特集2

ピティナ・ピアノ指導セミナーvol.3【中級編】

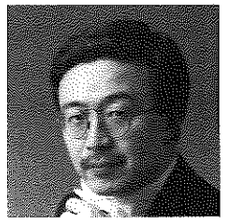
導入から上級への上手な橋わたし

PTNA Piano Teaching Seminar vol.3 PTNA Piano Teaching Se

金子勝子先生



熊谷洋先生



草川宣雄先生

杉浦日出夫先生

「導入期から、上級にかけての橋わたし」…この中級の時期を指導者がしっかり、おさえておかなければ、上級レベルの演奏にはついていけないといっても過言ではありません。ではこの時期にどのような点に留意して指導したらいいでしょうか。

去る4月26日(日)、ピティナ東京本部<東音>ホールにて行われた、ピティナ・ピアノ指導者セミナーvol.3は、まさにそのことを考えさせられるものでした。金子先生の「周りの人々とどう関わっていくか」から始まり、熊谷先生は「身体の機能を生かしたピアノ奏法」、草川先生は「日本人の民族性を踏まえた音楽演奏」最後の杉浦先生はご自分の経験より「音楽的に演奏するための必要な知識」など、多方面よりお話しいただきました。

どの先生のお話しも興味深く、限りある誌面ではその全てをお伝えすることはできませんが、ピアノ指導者のみなさんの自己研鑽や、新たな目標設定に役立ていただければと思います。

※一部、写真の画像が粗いものがあります。ご了承下さい。